

自然界に見られる神秘的とさえ言われる戯れた自然現象！それは人間の意志や働きかけとは無関係に自然の摂理によって起こる自然の驚異でもあり、見逃せない。世界では最も不思議な7つの自然現象があると言われが、時間や条件が揃わないと起きない。自然が引き起こす現象は、時に恐ろしく理解し難いが、やっぱり神秘的で美しい。”自然の不思議”は、広大な峡谷や山脈の様な巨大なものであり、一目瞭然と興味深いものがある。そして、最も素晴らしい自然現象の多くは、最も見つけにくいとさえ言われる。無数の星や惑星が天空に燦然と輝く夜空は正しく神秘的な代表と誰しも認めることである。

話はカナダ・バンクーバーのカナダ企業で約4年間過ごし、見たり聞いたり体感した事に遡る。

カナダは建国から200年足らずと日が浅いが、自然界と共存・共生しながら、自然環境の保護・再生の面で真正面から精力的に取り組んでいる姿を要所に見た。バンクーバーは雄大な山並みを背景に穏やかな入り江の海に面し、“人と自然と都市”が見事に調和した風光明媚な景観に、なんと心が癒される街だろうと思ったのである。世界の都市の中でバンクーバーは最も住みやすい都市として国連が推奨している。市街地は派手な看板・広告塔など無く、自然と調和した都市景観を有し、歴史的な古い遺産の街並みを頑なに守り続ける自然環境へのカナダ人の思いが知らされる。バンクーバーの街からすぐ近くに、街とほぼ同じ大きさの森の公園・スタンレーパークが広がる。そこは大会がすぐ傍にあるとは思えない巨大な原生林が茂る自然公園である。公園の周囲を取り巻くように遊歩道が整備され、休日には多くの人々が憩いを求めて散歩を楽しむ公園である。時折、ビクトリア島への空路定期便、水上飛行機（フロートプレーン）がスタンレーパークの上空を低空で飛び、コール・ハーバーの海上駐機場へ離発着する姿は優雅だ。そこは海上給油ステーションがあり、フロートプレーンの一時の休息の場といった感である。

イングリッシュ・ベイやスパニッシュ・ビーチの砂浜には公衆トイレの建物を除き、人工的な構造物は一切無い。あるのは、直径数十センチ、長さ数メートルの古びた不揃いの流木が海岸線と平行に整然と置かれ、これ等はビーチを訪れる人々の休息用ベンチだった。

又、自然との一体感を堅持するため、公共の場でのアルコール類飲酒は一切禁止されている。

バンクーバーから東に約100kmの所に位置するカルタス湖の水辺周辺にはキャンプ場が沢山あるが、湖面から視る岸辺には人為的な施設や構造物は一切見えず、生い茂る水辺の自然林のみである。之は自然を破壊しない環境保全の国を挙げての厳しいルールだった。

リゾート地で乱開発が横行し、人工的な構造物が乱立して自然環境が壊されて再生されることがない我が国とは、自然を大切にする国策と国民性が随分と異なる。

さらには、隣のアルバータ州に「オイルサンドの町・フォート・マックマレー」には推定埋蔵量1兆バレル以上のオイルサンドが埋蔵されていると云われ、オイルサンドから生産される石油はカナダの消費量の25%をまかなう。

“オイルサンド”は、露天掘り用の巨大な掘削機で採掘され、掘られた跡地はオイルが分離された元の砂で埋め戻される。そこには成長が早い自然回復のためポプラの木が植林され、牧場が再生されバッファロが放牧飼育されている。この再生の姿は開発会社と政府との「元の自然を復活する、つまり自然を破壊したら元の姿に戻す」が鉄則であり、自然の開発許可共生事業の前提条件であった。

業の前提条件であった。

豊かな自然に恵まれたカナダは自然環境を破壊することなく再生し、自然保護に懸命に取り組んでいる。改めてわが国の現実の姿はどうだろうかと思う。

母なる自然の恩恵や営みを忘れる事無く、より一層自然との触れ合いを大切に共存しながら過ごしたいと思うのであるが……。

2011年3月11日午後、M9.0の世界最大級の大地震が東北で発生した。同じころ、宮崎の新燃岳の火山爆発、ニュージーランドの大地震、激しい揺れに続く水塊の大洋波が重なった。想像を絶する甚大な被害・惨状を顧みて、自然の猛威は平和な人々に何と惨い仕打ちをするのだろうか、そして追いつちをかける様に発生した福島原発の事故、汚染水の難問題など、胸を痛めるばかりである。筆者は、少年の頃、緑豊かな筑後平野の穀倉地帯を集中豪雨が襲い、惨い天災の傷跡に心を痛めた60年前を思い出す。しかし、今回の災害は、これとは比較にならないほど甚大である。頑丈に構築された岸壁を乗り越え、目の前で起きた巨大な水塊の大洋波の暴走と甚大な被害に対し、為す術が無い人間の無力さを誰しもが胸を痛めたのである。

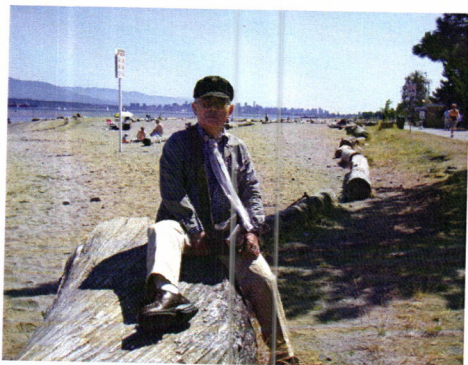
このような自然界の猛威とは対照的に、神秘的な自然現象で10数年に一度出現すると言われる現世とは思えない神秘的な自然現象『真っ赤なオーロラ』に期せずして2001年3月30日に遭遇した。

例へば極端かもしれないが、真赤な完熟のスイカの中に頭を突っ込んだ様で、元の現世に戻るのだろうかと不安がつのったのだ。この日、NASA(米航空宇宙局)は太陽の表面に地球の表面積の約13倍もの巨大な黒点が出現したと発表、この黒点の出現は過去10年間では、最も大きな黒点だったと報じていた。非常に出現の機会が少ない深紅色のオーロラを体感でき、生涯の宝物と言える出会いだったと省みている。オーロラの名前の由来は、ローマ神話の暁の女神アウロラ(Aurora)に由来すると言われる。

オーロラ発生原理は、極域近辺に見られる大気発光現象。明るさはレイリーで表され、通常は数千レイリー～数十千レイリー、明るいもので百千レイリー以上になる。日本本土で見られる確率は非常に少ない。夜になると音もなく現れ、天空を大きく舞う神秘の光、オーロラは太陽に端を発する荷電粒子からなる「太陽風」と呼ばれるプラズマ粒子の流れ(毎秒400～2000キロのスピード)が地球磁場と相互作用し大気中の粒子と衝突すると、大気粒子が一旦励起状態となり、それが元の状態に戻る時に発光する。発光原理は蛍光灯と同じと言われ、オーロラは1年中発生しているが、観賞するには周囲が暗い必要がある。オーロラは、赤色・ピンク色・紫色が出現するが、通常見られるのは緑色である。地上100km位のところで輝くオーロラの明るさは1ルクス程度である。最も見事に観測されるのは、磁場をベルト状に取り巻く「オーロラオーバル」地磁気緯度65～70°の極光帯(オーロラリング)で、カナダ、アラスカ、北欧にはよく知られた観賞スポットがある。

東日本大地震の惨い惨状と、人の手が届かない神秘的とも言えるこの自然現象を重ね合わせて、その威力を語るのはやや飛躍しすぎるかもしれない。今日のように人間は科学技術を進歩させたが、自然界の猛威には為す術が無い事をいやと言うほど知らされた震災であった。

2020年東京オリンピック開催が決まった。大地震の傷跡、破壊された自然環境等が完全に復興・再生され、人と自然と都市が融和した人類の祭典であって欲しいと願うばかりである。



「自然体なビーチの風景」イングリッシュベイ・バンクーバーにて



「フォートマックマレーのブラック・サンド」 アルバータ州



「真っ赤なオーロラ」、フォートマックマレー・アルバータ州